

研究課題	山岳聖地における宗教者の役割
研究代表者	高田 彩 (文学研究科宗教学専攻)

## 1. 研究目的

武州御岳山（以下御岳山）に関する先行研究は、管見の限り大きく二つに分けられる。(1)中世から近世における御嶽神社の運営組織や形態を明らかにした研究〔斎藤 1970〕、(2)御岳山と周辺地域との相互関係や講集団の実態を明らかにした研究〔西海 1983〕。(1)は御岳山内に目を向けた研究であり、(2)は御岳山外に目を向けた研究である。このことから、従来の御岳山研究における議論の中心は、御嶽神社の運営組織や御師の配札活動、御嶽講の講組織に関する問題だったといえよう。

本研究では、御嶽神社と講を結ぶ講員の宿泊基地である宿坊、とりわけ、宿坊の運営を担う御師とその女性家族の役割に注目する。現在の宿坊は、御嶽神社と講員にとっての結節点であるとともに、講員以外の宿泊客（観光客）を受け入れる機能も併せ持っている。平成期以降、講の減少、縮小が問題となるなか、御岳山では講員以外の宿泊客を受け入れる取り組みを行ってきた。それが御岳山観光事業である。特に、御岳山では 31 軒の宿坊が現存している。全国的に見ても、一山に 30 軒以上の宿坊が残っているのは山岳信仰の聖地としてはレアなケースであると考えられる。

また、宿坊運営の実態に目を向けてみると、神社の職務や冬期の配札活動（講社廻り）によって宿坊を留守にすることが多い御師に代わって、宿坊を運営するのは御師家の女性家族（妻、娘）であるという事実が気付く。しかしながら、これまでの研究では、宿坊運営における御師家の女性家族の役割については議論の俎上に上がることがほとんどなかった。加えて、山岳修験研究においても山内運営における女性の役割については注目されてこなかった。

これらの研究状況を踏まえて、本発表では、実際の宿坊運営を行う御師とその女性家族がどのような仕事を担い、宿坊にとってどのような役割を果たしているのか、また、御師とその女性家族の働きが御岳山の組織や運営にどのような影響を与えているのかを検討することを目的とする。

その際の視角として、御岳山で労働力を提供する女性を以下の三つに分類し、それぞれがどのような役割を担っているのかみていきたい。(1)御岳山に嫁いだ女性（妻）、(2)御岳山で生まれ育った女性（娘）、(3)御岳山に働きに来ている女性（アルバイト）。(1)は御岳山外からやってきて、御師家と婚姻関係を結ぶことで御岳山内に組み込まれるが、(2)は御岳山で生まれ育っても、いずれ婚出して御岳山からいなくなる存在である。一方で(3)は、(2)が通っていた小学校、中学校、高校の同級生ネットワークを通して集められることが多く、(2)が婚出してもその同級生のネットワークはなくならないという特徴を有している。このことから、(2)は婚出する前は直接的に、また婚出した後は間接的に労働力を提供し、御岳山と青梅市内の女性を結びつける役割を果たしているともいえよう。そして、(2)の同級生ネットワークで集められた(3)が成人し、何らかの契機によって御岳山の男性（御師）と結婚した場合、(1)になる事例が確認されている。以上のことから、(1)

(2)(3)の御岳山に関係する女性は相互に関連、循環するシステムを形成していると考えられる。

本研究では、以上の視角から、御師とその女性家族の宗教的役割とその意味付けの差異について検討し、御師家やその女性家族を含めた御岳山で暮らす人々の生活史を描写することを目指す。

## 2. 研究方法

上記研究目的を達成するために用いる研究方法は以下の三つである。

(1)文献調査。御岳登山鉄道と青梅線に関する文献調査（『青梅鉄道関連資料』など）を行うことによって、交通網の発達が御岳山にどのような影響を与え、御師の生活にどのような変化をもたらしたのか検討する。(2)参与観察。御師家が経営する宿坊の手伝いをする事により、実際の宿坊経営が誰によってどのように行われているのかを明らかにする。また、御師が12月下旬から3月上旬に行う講社廻りに同行することで、地域社会に現存する御嶽講の実態を把握するとともに、御岳山と地域社会にとって講がどのような意味付けのもと、双方にとってどのように機能しているのかを析出する。(3)御師および御師家の女性家族に対する聞き取り調査。(3)の方法を用いることによって、現在御師がどのような問題意識のもと、どのような活動をおこなっているのかを究明する。加えて、御岳山における御師家の女性家族（妻、娘）の位置づけと役割、その変化を、宿坊運営と婚姻に関する儀礼、そして通婚圏という視角から見ていく。上記の問題意識のもと質問項目を立て、聞き取り調査を行い、そのデータ分析を試みることで御岳山外と御岳山内双方から御岳山の現状と変化の要因を探る。

調査の年間スケジュールは以下の通りである。

1～3月、講社廻りの時期で御師が宿坊を空けるため、宿坊は閑散期にあたる時期である。この時期は、講社廻りに同行し、講の実態把握をするとともに、講員への聞き取り調査を行う。加えて、御師家の女性家族に聞き取り調査を行う。

4～5月、講員の代参が始まる時期であるため、宿坊でアルバイトをしつつ、御師家の女性家族が宿坊内でどのような役割を担っているのか参与観察型調査を行う。

6月、梅雨のため入山者が減る時期にあたる。山内の婦人部の総会があるため、そこでライフヒストリーに関する聞き取り調査を行う。

7～9月、代参は7月上旬で終了するが、夏休み期間に観光目的の入山者が多く訪れるため繁忙期にあたる時期になる。そのため、宿坊でアルバイトをしつつ御師家の女性家族が宿坊内でどのような役割を担っているか参与観察型調査を行う。

10～11月、観光目的の入山者がハイキング、紅葉狩りなどで訪れるため、御岳山観光協会の活動が最も活発な時期にあたる。御岳山全体が忙しいので、青梅市立中央図書館や青梅郷土資料館などで文献調査を行う。

12月、年末年始は講員への札の送付やその準備に加えて12月下旬から講社廻りが始まるため、御師は多忙な時期になる。宿坊でアルバイトをしつつ、御師家の女性家族が宿坊内、ひいては山内でどのような役割を担っているか参与観察型調査を行う。

### 3. 研究成果と公表

研究成果の成果は以下の学会、シンポジウムにて公表した。

(1)大正大学宗教学会 2017 年度春期大会「交通網の発達にみる聖地の変化―武州御岳山を事例として―」(2017 年 6 月)、(2)日本宗教学会第 76 回学術大会「神仏分離令への対応と観光化―修験系集団を事例として―」(2017 年 9 月)、(3)講研究会公開シンポジウム「交通網の発達と御師の生活の変化」(2017 年 12 月)。

(1)では、御岳山と青梅鉄道・御岳登山鉄道を事例として取り上げ、明治時代以降、全国的にみられる寺社仏閣（聖地）と鉄道会社の関係性を以下の指標によって類型化した。氏子、檀家、講などの帰属意識を有する共同体型、氏子、檀家、講などの帰属意識を持たない浮動層を参集型とし、鉄道会社をはじめとする産業セクターがイニシアチブを握っている鉄道会社主導型、寺社仏閣などの聖地側がイニシアチブを握っている聖地主導型と設定した。

これらの指標を立て類型化し、他の寺社仏閣と比較することで御岳山の事例が類型のどこに位置付けられるのか検討した。そのような分析を通して、本研究の御岳山は、寺社仏閣共同体型と寺社仏閣参集型の垂直の類型間移動が見られ、先行研究の事例とは異なる類型間移動をしていることが判明した。

(2)では、大きな混乱なく神仏分離令へ対応した修験系集団は、観光への着手が早期に行われたという仮説を立て、武州御岳山と戸隠を比較することで神仏分離令への対応と観光化のプロセスを検討した。1930 年代になると、御岳山周辺では、鉄道網の発達や国民精神総動員運動の一環としての登山ブームなどがあいまって、外的な要因から観光地化が進み、一方の戸隠では、道路整備によるバス網の発達によって観光客が増加した。このことから、両者とも 1930 年代における交通網の発達により観光地化が進んだことが明らかになった。

(3)では、交通網の発達、とりわけ鉄道網の発達が聖地・霊場にどのような影響を与えたのかという問題意識のもと、御岳登山鉄道と御岳御師に注目し、御岳山観光事業の取り組み―平成 23 年から 3 カ年行われていた「おいぬさま」活性化事業―を事例として、交通網の発達によって御師の生活がどのように変化したのか検討した。